

経験機械と三つの仮想世界 ——ハリウッド映画の哲学（二）

小 笠 原 史 樹*

目次

序

第一節 経験機械

第二節 マトリックス①——ネオの選択（以上前稿、以下本稿）

第三節 マトリックス②——サイファの選択

第四節 シーヘブン（以上本稿、以下次稿）

第五節 ドリーム・マシン

第六節 考察

第三節 マトリックス②——サイファの選択

【サイファの選択】

前節の後半で確認した通り、青いピルか赤いピルかを選ぶネオの選択は、すでに機械につながれた状態での選択であること、機械に接続し始めるかどうかではなく機械との接続を切るかどうかの選択であること、ネオは自分が何をしようとしているかについてほとんど無知であることなどから、ノージックの思

* 福岡大学人文学部准教授

考実験における選択とは異なる。ネオは半ば盲目的に真実を求め、問いへの答えを求める。そして、得られた答えが絶望的なものだったとしても、彼はその答えを受け入れる。

しかしネオとは対照的に、サイファにとって当該の答えは、受け入れられるべきものであるよりも、忘れ去られるべきものでしかない。

作品の中盤、サイファがマトリックス内で、エージェント・スミスと同席して夕食をとる場面がある。

エージェント・スミス：取引は成立かね、レーガンさん？¹

サイファ：なあ、このステーキが実在しないのはわかってる。これを口に入れると、マトリックスが俺の脳に、これはジューシーでうまいって伝えるだけなんだ、ってわかってる。九年経って、俺が何を悟ったと思う？ 知らない方が幸せ、ってことだ。

スミス：じゃあ、取引は成立だ。

サイファ：俺は何も覚えていたくない。何にもだ、いいな？ それから、俺は金持ちになりたい。ほら、地位のある誰か、俳優みたいな。

スミス：お好きなように、レーガンさん。

サイファ：よし。俺の身体を発電所に戻して、俺をマトリックスにつなぎ直してくれ。欲しいものをやるよ。(MTR., 1:03:38-1:04:57)²

¹ この場面でサイファは「レーガン」という名前で呼ばれている。

² AGENT SMITH : Do we have a deal, Mr. Reagan?

CYPHER : You know, I know this steak doesn't exist. I know that when I put it in my mouth, the Matrix is telling my brain that it is juicy and delicious. After nine years, you know what I realize? Ignorance is bliss.

AGENT SMITH : Then we have a deal.

CYPHER : I don't wanna remember nothing. Nothing, you understand? And I want to be rich. You know, someone important, like an actor.

AGENT SMITH : Whatever you want, Mr. Reagan.

CYPHER : OK. You get my body back in a power plant, reinsert me into the Matrix. I'll get you what you want.

サイファは仲間を裏切り、モーフィアスをエージェント・スミスに引き渡し、と約束する。この裏切りの報酬は、マトリックスから救出されて以降の記憶を消し、自分の身体をマトリックスにつなぎ直すこと、さらにマトリックスにおいて、自分を自分の望み通りの人物にすることである。真実を忘却し、機械による支配を受け入れる、というサイファの選択は、真実と自由を求めるネオの態度と真逆で、二人は好対照をなしている。

ノージックによる経験機械の思考実験との関連でも、ネオの選択とサイファの選択との違いが際立つ。上記のように、ネオの選択はノージックの思考実験における選択とは異なるが、サイファの選択が行われる状況は、ノージックの想定した状況にかなり近い。第一に、サイファが選ぼうとしているのは、一旦マトリックスから切り離された身体をもう一度マトリックスにつなぎ直すことであり、彼の選択は、機械との接続を切るかどうかではなく、機械に接続し始めるかどうかに関わっている。第二に、彼はネオと異なり、自分が何を選ぼうとしているか、明確に自覚しており、また、マトリックス内で得られる経験も指定している。サイファはマトリックスにつながれることで、自分の望み通りの、金持の俳優としての人生を経験しようとしている。自分がマトリックスにつながれている事実を忘れようとしている点も、ノージックの思考実験に近い。

仮に、サイファの置かれている状況と、ノージックの想定している状況との違いを挙げるとすれば、その違いは、マトリックス外の現実世界の悲惨さにある。ノージックは著書において、我々が経験機械につながれようとは思わないだろうことを半ば自明視し、その理由を挙げていた（第一節参照）。しかし、サイファが荒廃した大地で、機械と絶望的な戦いを繰り返していることを考慮するならば、この状況下でサイファがマトリックスにつながれるのを選ぶことは、必ずしも不可解ではないだろう。ノージックが、経験機械につながれることで失われるような、現実世界の持つ「深さ」に注目しているのに対し、サイ

ファが直面しているのは、すでにあまりにも多くのものが失われてしまった現実世界である。少なくともサイファにとって、この現実とは、仮想でないという理由だけで留まるに値するものではない。サイファの行動は一種の「逃走」であり、ともすれば、彼はあくまでも消極的に、マトリックスにつながれ直すことを選ぶにすぎない。³

以上のような選択とは別に、サイファはネオと同様、青いピルか赤いピルかの選択を経験し、赤いピルを選んでいる。作中、彼がその選択を後悔する場面が二箇所あり、その一つ目は、エージェント・スミスとの上記の密会の直前、サイファがネオと会話する場面である。

サイファ：なあ、お前が何を考えてるか、わかるよ。おれも今、同じことを考えてるからな。実は、ここに来てからずっと考えてるんだ。なぜ、ああ、なぜ俺は青いピルを選ばなかったんだ？ (*MTR.*, 1:02:00-1:02:16)⁴

ネオは一旦サイファから視線を外して軽く微笑むが、必ずしもこの冗談めかした言葉に同意するわけではなく、改めてサイファを見つめ直したネオの表情には、幾らか当惑したような様子も見られる (cf. *MTR.*, 1:02:16-1:02:24)。

二つ目は、現実世界にいるサイファが仲間たちを裏切って追いつめた後で、機械につながれた状態の彼らの身体を前に、マトリックス内のトリニティと会話する場面である。ピルの選択をめぐる、サイファとトリニティの考えは明

³ デ・ブリガードの実験において、現実には監獄にいる囚人である場合、機械との接続を切って現実に戻るのを選ぶ人々は全体の13%のみで、87%の人々は接続されたままであることを選んだ(第二節参照)。この実験が、すでに機械につながれている人々の選択としてではなく、監獄にいる囚人の選択として設定し直された場合、上記の数字がどのように変わるのかはわからないが、おそらくサイファが「少数派」でないだろうことは、この実験結果からも想像される。

⁴ CYPHER: You know, I know what you're thinking, because right now I'm thinking the same thing. Actually I've been thinking it ever since I got here. Why, oh, why didn't I take the blue pill?

確に異なっている。モーフィアスに「だまされた (He lied to us, Trinity. He tricked us)」と怒るサイファに (cf. *MTR.*, 1:28:17-1:28:21)、トリニティが言う。

トリニティ：違うわ、サイファ。彼は私たちを自由にしてくれたの。

サイファ：自由？これが自由だって？結局ヤツの言いなりじゃないか。

これとマトリックスから選ばなきゃならないなら、俺はマトリックスを選ぶよ。

トリニティ：マトリックスは現実じゃないのよ。

サイファ：意見の違いだね、トリニティ。俺が思うに、この世界よりもマトリックスの方がリアルだよ。(MTR., 1:28:26-1:28:53)⁵

サイファは、マトリックスにつながれて機械の支配下に置かれることに、モーフィアスの指揮下で機械との戦争に明け暮れることを対置する。サイファにとって、後者を「自由」と呼ぶトリニティの発言は受け入れられるものではなく、同様に、現実世界をマトリックスより「リアル」と見なす彼女の考えにも、サイファは同意できない。彼は自由や現実性の持つ価値を必ずしも否定しているわけではなく、むしろそれらをこの現実世界ではなく、マトリックスの内に求めているにすぎない。

その世界がリアルかどうかを、トリニティが、経験している通りの出来事が実際に起こっているかどうかを即して、いわば経験の外側との対応関係において判断しているのに対し、サイファは経験の内側から、その経験がどのような内容を持つのか、という点に即して判断する。トリニティの基準に従うなら

⁵ **TRINITY** : That is not true, Cypher. He set us free.

CYPHER : Free? You call this free? All I do is what he tells me to do. If I had to choose between that and the Matrix, I choose the Matrix.

TRINITY : The Matrix isn't real.

CYPHER : I disagree, Trinity. I think the Matrix can be more real than this world.

ば、マトリックスは現実ではないだろうし、サイファもその点は認めるだろう。しかしサイファは現実について、その基準を採用していない。

マトリックスと現実世界における経験の違いは、食事の違いに象徴される。サイファとエージェント・スミスが同席して夕食をとる上記の場面には、現実世界の戦艦内でネオたちが、どろどろした流動食のようなものを食べるシーンが続く⁶。この流動食には身体に必要なものがすべて含まれている、と言うドーザーに、マウスが「身体に必要なもの全部なんて入ってないよ (It doesn't have everything the body needs)」と応じているのは示唆的である (cf. *MTR.*, 1:06:08-1:06:13)。直後、マウスはネオを、マウス自身がプログラムした「赤いドレスの女性」との性的な関係に誘う。「自分の衝動を否定するのは、人間であることを止めるってことだ (To deny our own impulses is to deny the very thing that makes us human)」(*MTR.*, 1:06:41-1:06:47)。身体を持つ性的な欲望をこの流動食が満たしてくれないのと同様、食欲もまた、この流動食によっては十分に満たされないだろう。欲望を満たし得る食事は、現実世界においてではなくマトリックスにおいてのみ経験可能であり、故にサイファは、マトリックス内での食事を選ぶ。

サイファの選択は経験の内容に関わっている、という点をより明確にするために、以下に四つの選択肢を挙げる。ステーキやワインを楽しめるような食事を **S**、どろどろの流動食 (goop) を **G**、マトリックスを **M**、現実世界を **R** と略記する。

- ① **M** で **S** を経験する
- ② **R** で **S** を経験する

⁶ サイファはトリニティとの会話で、次のように述べている。「俺は疲れたよ、トリニティ。この戦争にも疲れたし、戦うことにも疲れたし、船にも、寒さで凍えることにも、あの忌々しい同じどろどろを毎日食べ続けることにも (I'm tired, Trinity. I'm tired of this war, tired of fighting, tired of the ship, being cold, of eating the same goddamn goop every day)」(*MTR.*, 1:27:34-1:27:47)。

③MでGを経験する

④RでGを経験する

それぞれの選択肢は必ずしも相互に対立しているわけではなく、例えば、これら四つをすべて選択することも、少なくとも論理的には可能である。ただし物語の設定上、②はほとんど不可能であり、また①も、サイファにとってはエージェント・スミスに協力することでのみ可能となるのだろう。仲間を裏切るか否かとは無関係に、サイファが①と②をどちらでも自由に選び得る状況だったならば、彼は②を選んだかもしれないが、そのような選択の自由は与えられていない。サイファはGを嫌悪しているため、③と④を選ぶことはないはずであり、したがって彼が、仲間を裏切って①を選択することは当然である、とも考えられる。マトリックス内での経験か現実世界での経験かにかかわらず、彼はSという経験を求め、Gという経験を拒否しているにすぎない。

他方、同じ状況下で、ネオやトリニティは④を選択するだろう。彼らにとっては、どのような経験であれ、その経験が現実世界におけるものであることが最も重視されるからである。

以上のような、経験の内容を優先するサイファの立場と、経験が現実世界におけるものであることを優先するネオたちの立場、という二つに関して、物語の展開上、前者は不適切な立場であるように見えるが、サイファの選択は決して理解不可能なものではなく、間違っているとも限らない。経験の内容としてGよりもSを選ぶこと自体には、多くの人が共感するだろうし、もし仲間を裏切ることなしにその選択がなされるならば、サイファの行動の不適切さはさらに緩和されるだろう。彼が仲間を殺すことも、モーフィアスを引き渡すこともなく、単に一人でマトリックスにつながれ直すだけならば、やはりその行動は現実や戦闘からの逃避であるにせよ、死に値する程の罪として断じられること

はないはずである⁷。また、マトリックス内で青いピルか赤いピルかを選ぶ際、自分の選択の結果について十分な情報を与えられたサイファが青いピルを選び、マトリックス内に留まったとしても、その選択は大して不合理なものとも、不適切なものとも見なされないだろう。

経験の内容と現実とのどちらを優先すべきか、答えは自明ではない。サイファが間違っているとは限らず、ネオたちが正しいとも限らない。同様に、経験の内容を優先して経験機械につながる、という選択が不適切とは限らず、経験が現実世界におけるものであることを優先して経験機械につながらないでよく、という選択が適切とも限らない。ノージックは経験機械につながらない理由の一つとして「我々が求めるのは何かをすることであり、何かをする経験だけではない」という点を挙げていたが、サイファが求めているのは何かをする経験であり、実際に何かをすることではない。より正確に述べるならば、サイファは何かを経験すること（例えばS）、及び何かを経験しないこと（例えばG）を、実際に何かをしたりしなかったりすることよりも優先して求めているのであり、故に特定の状況において経験機械につながれようとすることは、彼にとって合理的な選択となり得る。

【現実であることは常に望ましく、あるいは必要か？】

もちろん、合理的な選択かどうかはともかく、サイファの選択が一種の「現実逃避」であるとは言えるだろう。彼はマトリックスにつながれ直すことで戦

⁷ 作品中、仲間を裏切ったサイファはタンクに殺されるが、仮にサイファが、仲間を傷つけることなしにマトリックス内に戻ろうとしたただけであるにもかかわらず殺されたとすれば、その殺害は過剰なものと感じられるだろう。戦闘から逃避すること自体を重大な罪と見なす場合もあり得るだろうが、その場合でも、問題視されるのは戦闘からの逃避であり、現実世界からの逃避ではない。また、「サイファが、映画のような享楽主義者ではなく、マトリックス世界においてマザー・テレサやネルソン・マンデラのような「人生」を選択したとすればどうか」という指摘もある（cf. 水谷 [2009], p. 71）。この指摘を考慮するならば、やはり現実世界からの逃避が（少なくとも逃避だけが）問題になっているわけではない、とわかる。

闘から逃避し⁸、実際に何かをすることから逃避する。

しかし、このような逃避が常に否定的なものであるとは限らない。単に何かをする経験が得られるのみで、実際に何かをするわけではない、という事態が肯定的に評価される場合も考えられる。

機械によって与えられる経験と現実世界における経験とが全く同一であるならば、どちらを選ぶか、と問うてみよう。一見、答えは自明であるように思われる。すなわち、経験の内容が全く同じであるならば、機械によって与えられる経験よりも現実世界における経験の方が望ましい、と直ちに解答できるかのように感じられる。

先に挙げた、四つの選択肢を再び用いる。①と②のどちらかを選ぶならば、②を選ぶ人が多いだろう、と、とりあえずは予想される。しかし、③と④のどちらかを選ぶ場合、多くの人が④を選ぶとは限らない。Gを好ましくない経験と見なす人は、その経験がせめて現実世界のものではなく、単に機械によって与えられたものでしかないことを望むかもしれない。また、①と②の選択に関しても、肉食主義者は①を選ぶだろう。肉を食べる経験は厭わしいものであるとしても、②は実際に肉を食べ、そのために牛が殺されるのに対し、①は単に経験が与えられるのみで、実際に肉を食べることはなく、そのために牛が殺されることもない。肉食主義者以外でも、健康上の理由から、あるいは食糧難への配慮などから、②ではなく①を選ぶ人も少なくないだろうし、先の予想に反して、①を選ぶの方が多数となる可能性もある。

ある経験が現実世界におけるものであることが、それ自体として常に何らかの肯定的な価値を持つならば、機械によって与えられる経験と現実世界における経験とが全く同一である場合には、常に後者が選択されるはずである。しかし上記のように、両者が全く同一であるとしても、後者が選択されるとは限ら

⁸ マトリックスにつながれ直すことが実は機械との戦いの一部だった、という類のストーリー展開も想像可能ではあるが、サイファの場合には当てはまらない。

ない。第一に、その経験が否定的なものである場合には、当該の経験が単に機械によって与えられたにすぎないこと、現実世界におけるものでないことが、肯定的に捉えられ得る。さらに第二に、その経験が単に機械によって与えられるだけで十分であり、現実世界におけるものであることまでが必ずしも求められない場合にも、機械によって与えられる経験の方が選ばれ得る。

第一の場合に当てはまるような経験を列挙することは容易である。肉を食べることが動物の殺害を伴うのと同様に、他者に危害を加える経験、あるいは危害を加えられる経験のほとんどは、現実世界におけるものであるよりも、単に機械によって与えられたにすぎない方が望ましいだろう⁹。何かを夢の中で経験し、目覚めて「夢でよかった」と感じられるような経験はすべて、このケースの具体例となり得る。夢ではなく現実であることが、常に望ましいとは限らない。

また、様々な欲望を満たす経験の多くが、第二の場合の具体例として挙げられる。肉を食べようとする欲望ではなく、実際に肉を食べる行為のみに反対するような菜食主義者は、肉を食べたがる人々が、機械によって与えられる肉食の経験のみで満足し、実際に肉を食べることまで求めないならば、彼らが機械によって欲望を満たすことには反対しないはずである¹⁰。第一の場合に挙げたような、他者に危害を加える、あるいは危害を加えられることについても、それらの行為への欲望を現実世界においてではなく、機械から与えられる経験によって満たそうとする限りにおいて、当該の欲望を満たすことが許容される¹¹、

⁹ 絶対的な非暴力の立場をとらない限り、ある特定の条件下で、物理的な暴力の行使が正当化される場合などは、この例外となり得る。例えば、PがQによって物理的に攻撃されており、この攻撃を止めてPを守るためには同じく物理的な暴力を行使する以外の手段がないとき、Qへの暴力の行使は単に経験されるだけでは不十分で、実際に行使されなければならない。

¹⁰ 他方、実際に肉を食べるかどうにかかわらず、肉を食べようとする欲望それ自体が否定される場合には、機械によって肉食の経験を得ることもまた否定されるだろう。

¹¹ この場合、仮に本人が、現実世界において他者に危害を加えること、あるいは危害を加えられることを強く望んだとしても、そのような欲望を現実世界で満たすことは認め

という立場も想定される。マウスがネオに提案したのも、現実世界においてではなく、機械内の経験によって性的な欲望を満たすことであり、ネオがこの誘いに乗るかどうかはともかく、現実世界における実際の行為を伴うことなしに、行為の経験だけで欲望が満たされるならば、その欲望は必ずしも、現実世界の行為を求めるものではなかった、ということになる。この類の欲望を満たすために必要なのは経験のみであり、その経験が現実世界におけるものであるか否かは本質的ではない¹²。機械によって与えられる経験によっても現実世界における経験によっても、この類の欲望は等しく満たされ得るのであり、このとき、何かをする経験以外の、実際に何かをすることは不要であり、余計ですらある。

以上のように、我々は常に、何かをすることを求めているわけではなく、何かをする経験だけを求める場合もある。同様に、ある経験が現実世界におけるものであることを常に求めているわけでもなく、むしろ当該の経験が現実世界におけるものでないよう願うこともある。

【行為の経験と実際の行為との区別】

ところで、サイファとエージェント・スミスとの密会が、食事の場面として描かれていることには、おそらく十分な理由がある。マトリックス内の高級レストランでエージェント・スミスを前に、分厚いステーキを頬張って溜息をつくとき、現実世界におけるサイファは戦艦内で機械につながれ、横たわっている。彼はステーキを食べる経験をしているが、実際にステーキを食べているわけではない。この場面において、サイファが経験していることと、現実世界で起っていることとの相違は明らかである。サイファは、口の中で肉を噛んでい

られず、単にその経験を得ることのみが認められる。

¹² もちろん、あらゆる欲望が現実世界の行為なしに、行為の経験だけで満たされるわけではない。例えば、他者と接触する経験だけでなく、実際に他者と接触することを求めるならば、機械によって与えられる経験だけでは不十分だろう。前稿、註 22 参照。

と感じているが¹³、口の中に肉は存在しておらず、彼が感じている通りのことが実際に起こっているわけではない。

しかし、このような明確な相違は、食べるという類の行為だからこそ示され得るものでしかない。食べること以外にも、椅子に触れること、黒いコートを着て歩くことなど、その行為が、現実世界に存在する何かを身体が取りこんだり、その何かに身体が触れたり、身体が現実世界において動いたりすることなどを必要とする場合、それらの条件を満たしているか否かによって、当該の行為が現実世界におけるものか否かが判断され得る。つまりこの類の行為については、何かをしていると感じることと実際に何かをすることとの区別が比較的容易である。他方、あらゆる行為について、そのような区別ができるとは限らない。

もし密会の場所が、高級レストランではなく映画館だったならばどうか、と考えてみよう。高級レストランでサイファが「このステーキが実在しないのはわかっている」と語ったのと同様に、映画館で「この映画が実在しないのはわかっている」あるいは「俺が今映画を観ていないのはわかっている」と発言したならば、この発言は奇妙に響くだろう。確かに、映画のスクリーンがサイファの前に実在しているわけではなく、そのスクリーンに映画が映し出されているわけでもない。しかし、彼が映画を観ていること自体は事実であり、彼が観ている映画は少なくとも「情報」として実在している¹⁴。また、この密会が大学の演習室で

¹³ ただしサイファは、この肉が実在しない、と知っており、このとき、彼の経験していることと、自分の経験に関する彼の理解との間にも相違がある。「経験」の内に、自分の経験に関する理解をも含めるならば、この場面でサイファは、ステーキを食べていると感じてはいるが、自分はステーキを食べていないと理解している限りにおいて、ステーキを食べる経験をしているわけではない、と述べることも可能である。

¹⁴ 映画を観るとはすなわち、映画館で、映画のスクリーンに映し出された映像を観ることである、と定義するならば、サイファは映画を観ていないことになる。この場合、テレビ画面などで映画を観ることも、映画を観ることから除外されることになるが、そのような定義も不可能ではない。ただし、映画を観る仕方については一旦無視して、作品それ自体に注目した場合、この世界に一つしか存在しないような絵画や彫刻とは異なり、映画は基本的に、複製されることを前提として製作される。この点で映画は、文学作品

行なわれ、黒板を前にサイファが数学の問題について考えている、と想像するならば、その場面でサイファが「この数学の問題が実在しないのはわかってる」あるいは「俺が今数学の問題について考えていないのはわかってる」と発言するのは、やはり奇妙に感じられるだろう。黒板やチョークは実際しないとしても、彼が数学の問題について考えていること自体は事実であり、彼が考えている問題も、彼が考えている対象としては実在しているからである¹⁵。

また、先に挙げたサイファとトリニティの会話は、電話で行われている。現実世界の戦艦内でサイファはマイクの付いたヘッドフォンを着け、マトリックス内でトリニティは携帯電話を手に行っている。サイファの着けているヘッドフォンは実在しているが、トリニティの持つ受話器は実在していない。しかし、二人は実際に会話をしており、現実世界のサイファとマトリックス内のトリニティとの間に、この点で違いはない。さらに、サイファはエージェント・スミスとマトリックス内で会話をしているが、相手がコンピュータのプログラムでしかないにもかかわらず、二人は実際に会話をしている、と言って構わないだろう。

これらの行為については、何かをしていると感じることと実際に何かをすることとの区別が難しいか、あるいは不可能である。そして、その行為を経験していることと、その行為が現実世界において起こっていることとが必ずしも明確に区別され得ないとすれば、これらの行為について、その行為が機械内で行われるか現実世界で行われるかを問う必要はなくなる。機械につながれた状態で数学の問題について考えることと、機械につながれていない状態で数学の間

に近い。サイファが美術館で彫刻を観ながら「この彫刻が実在しないのはわかってる」と発言した場合、この発言は自然に聞こえるのに対して、映画や文学作品についての同様の発言は不自然に感じられるだろう。おそらく演劇やライブ・コンサートについては彫刻の場合に近く、音を加工することで完成する類の音楽作品については映画や文学作品の場合に近い。他方、複製されることを前提に描かれた絵画やデジタルアート、文学作品の朗読など、以上の整理に収まらないものも多い。

¹⁵ 今、数の実在性や「考えている対象」の実在性をめぐる諸議論は無視しておく。

題について考えることの中に、この行為それ自体に関して、実質的な違いはない。したがって、機械につながれているかどうかという身体の状態については考慮せずに、「数学の問題について考える」という行為のみに注目するならば、機械によって与えられた仮想現実と仮想でない現実との区別が行為に影響しないだけでなく、この区別そのものができなくなる可能性すらある。

映画「マトリックス」では、物語の設定上、マトリックスにつながれているか否かという身体の状態に即して、仮想世界と現実世界とが比較的明確に区別されている。上記の考察で辿りついたのはそのような区別が曖昧となる問題圏であり、今や提起されつつあるのは、そもそも仮想現実と仮想でない現実とは常に区別され得るのか、という問いである¹⁶。おそらくこの問いは、身体の状態だけではなく、すでに現実の内に含まれている「仮想」に関わる。

この点について考察するために、次に、機械につながれることなしに構築される仮想世界を取り上げることにしよう。

第四節 シーヘブン

【シーヘブン】

映画「マトリックス」のマトリックス、及びマトリックスをめぐるネオとサイファの選択に関する分析に引き続き、映画「トゥルーマン・ショー」(*The Truman Show*, 1998)のシーヘブン、及びシーヘブンをめぐるトゥルーマンの選択について分析する。

「トゥルーマン・ショー」の主人公トゥルーマンは、シーヘブン (Seahaven) という島で暮らしている。彼は保険のセールスマンとして働いており、快活な

¹⁶ 前稿の註26で、この問いについては第三節で論じると予告したが、訂正する。この問いについて詳述されるのは次の第四節においてであり、本節の議論はあくまで問題提起に留まる。

妻や幼馴染みの親友と共に平穏な日々を送っているが、実はこの島の全体は巨大な撮影セットで、トゥルーマン以外の人々は全員、雇われた俳優やエキストラである。トゥルーマンが生まれてから現在まで、約30年間の生活は隠しカメラなどによって撮影され、「トゥルーマン・ショー」というテレビ番組として生中継で世界中に放映され続けており、トゥルーマン本人だけがその事実を知らない。

このとき、多くの人は直感的に、トゥルーマンの生は本物ではなく、彼は偽物の生を生きている、と感じるだろう。しかし、そのような最初の印象は妥当なのか。彼の生を本物ではないと判断する根拠、偽物であると判断する根拠は一体どこにあるのか。この問いに答えることは、必ずしも容易ではない。

作品冒頭の場面で、「トゥルーマン・ショー」の製作者であるクリストフは、次のように語っている。

クリストフ：彼が暮らしている世界は幾つかの点でまがい物だが、トゥルーマン自身には何のやらせもない。台本もないし、キューカードもない。いつもシェイクスピアみたいにはいかないが、本物だ。人生なんだ。(TS., 00:31-00:49)¹⁷

この場面に、鏡の前で自分に話しかけるトゥルーマンのライブ映像を挟みつつ、トゥルーマンの妻であるメリル役の女優のインタビューと、親友であるマーロン役の俳優のインタビューが続く。

メリル：そう、私には、プライベートな生活と公の生活との区別がないの。

¹⁷ CHRISTOF : While the world he inhabits is in some respects counterfeit, there's nothing fake about Truman himself. No scripts, no cue cards. It isn't always Shakespeare, but it's genuine. It's a life.

私の人生は私の人生だし、「トゥルーマン・ショー」なの。「トゥルーマン・ショー」がライフスタイルね。誇れる人生だし、本当に恵まれた生活よ。(TS, 01:24-01:42)¹⁸

マーロン：全部真実だし、全部本当だ。ここに偽物なんて何もない。この番組に偽物なんて映っていない。ただコントロールされているだけなんだ。(TS, 02:01-02:10)¹⁹

この場面でクリストフがトゥルーマンの「偽りのなさ」(nothing fake)と直接比較しているのは、他の番組で俳優たちが見せるまやかしの感情(phony emotions)や華々しい爆破技術と特殊効果(pyrotechnics and special effects)のことではあるが(cf. TS, 00:21-00:31)、三人が口にする「人生・生活」(life)や「本物・本当」(genuine, true, real)という言葉は、番組同士の比較という範疇を超えている。彼らが言おうとしているのは、単に「トゥルーマン・ショー」が他の番組よりも真に迫っているだけではなく、実際にトゥルーマンが本物の生を生きている、ということだろう。

確かにトゥルーマンは生を営んでおり、何らかの生を生きている。例えば、彼は妻のメリルと一緒に暮らしている。「メリル」は役名で彼女の本名ではなく、二人の婚姻が法的に裏づけられたものか否かも定かではない。しかし、二人が夫婦として同居し、寝食を共にしていることは事実である。放送はされない

¹⁸ MERYL : Well, for me, there is no difference between a private life and a public life. My life is my life, is “The Truman Show”. “The Truman Show” is a lifestyle. It’s a noble life. It is a truly blessed life.

¹⁹ MARLON : It’s all true. It’s all real. Nothing here is fake. Nothing you see on this show is fake. It’s merely controlled.

が、二人には性的な関係もあり²⁰、子供の誕生が望まれてもいる²¹。仮に子供が産まれた場合、その子供もやがて製作者の側に回って台本に従うことになるのか、あるいはトゥルーマンと同じ立場に置かれるのかはわからないが、いずれにせよ産まれてくる子供はトゥルーマンとメリルの子供であり、二人がその子供の親であることに嘘はない。実現はしなかったものの、「トゥルーマン・ショー」は子供の誕生によっても妨げられることなく続いただろうし、トゥルーマンは今生きている生を生き続けただろう。

トゥルーマンとメリルの夫婦関係は偽りなのか。徐々に疑いを募らせていくトゥルーマンにメリルが耐えられなくなり、結局、二人の関係は破綻する。メリルが最後に泣きながら話す「こんな状況で続けられるわけじゃないじゃない？ 仕事にならないわ（How can anyone expect me to carry on under these conditions? It's unprofessional）」という言葉は、メリルがこの関係をあくまでも職業上のもの（professional）として捉えていることを示している（cf. *TS.*, 55:04-55:12）。他方、トゥルーマンは別の女性に想いを寄せながらも（後述）、大学時代に出会ったメリルとの結婚を自由恋愛の結果と見なしているはずであり（cf. *TS.*, 20:11以降）、夫婦関係についてのお互いの認識は決定的に異なっ

²⁰ メリルがトゥルーマンをベッドに誘った直後、テレビを眺めている警察官が、同僚に次のように話す場面がある。「どうせ何も見せてくれないんだ。いつもカメラが切り替わって音楽が流れて、風が吹いてカーテンが動いて、何も映らないんだよ（You never see anything anyway. They always turn the camera and play music, and the wind blows in, and the curtain moves, and you don't see anything）」（*TS.*, 14:16-14:28）。もちろん、性的な関係を持つことが直ちに、二人が夫婦であることを意味するわけではない。

²¹ 島の外への冒険旅行に誘うトゥルーマンに、メリルは「子供を作るんじゃないの。それも立派な冒険じゃない？（I thought we were gonna try for a baby. Isn't that enough of an adventure?）」と抗議し（*TS.*, 13:47-13:53）、トゥルーマンの母親、つまり母親役の女性は「死ぬ前に孫を抱きたいわ（I would like to hold a grandchild in my arms before I go）」と話す（*TS.*, 37:51-37:56）。メリルへの疑いが極まった場面でトゥルーマンが問い質すのも、やはり子供のことである。「なぜ僕との子供を欲しがるの？ 僕のことを嫌いなのに（Why do you wanna the baby with me? You can't stand me）」（*TS.*, 53:33-53:39）。

ている。しかし、この認識の違いから直ちに、二人が本当の夫婦でない、とは結論できない。結婚の動機や経緯について妻が夫に嘘をつき、結婚後も長く「理想的な妻」を演じ続けたとしても、二人が夫婦でないことにはならない。当該の夫婦関係について、そのような関係は望ましいものではなく、その意味で「本物」ではない、と言うことはできるかもしれないが、その基準を適用するならば、トゥルーマンとメリルの関係だけではなく、他の多くの夫婦関係も本物ではないことになってしまう。

マーロンとの友人関係についても同様である。親友であるはずのマーロンは、番組から与えられた役を演じているにすぎない。彼がトゥルーマンに対して、クリストフからマイクで指示された通りの言葉を繰り返すだけの場面もある。「君に嘘なんて絶対につかないよ (The last thing that I would ever do is lie to you)」(TS., 57:43-57:56) と真摯な表情で話すとき、マーロンは明らかに嘘をついている。しかし、彼が幼少期からトゥルーマンと多くの時間を共有し、共に成長してきたこと自体は嘘ではない。マーロンはトゥルーマンの幼馴染み役であると同時に、実際の幼馴染みでもある。「俺たち、七歳の頃からの親友だろ、トゥルーマン (I've been your best friend since we were 7 years old, Truman)」(TS., 56:09-56:13)。トゥルーマンが騙され続けている点で、この友人関係は望ましいものではないかもしれないにせよ、その一点を理由に、二人が友人であることまでもが全面的に否定されるとは限らない。

すべての台詞をクリストフが口頭で指示しているわけではなく、すべてが台本通りに進むわけでもないだろう。トゥルーマンの発言や行動を予測することはできるとしても、その予測も完璧ではない。ならば、役者たちは自分に与えられた役の範囲で、クリストフからの指示や台本などを踏まえながら、状況に応じてしばしば即興的に振舞っているのだろう、と想像される。

ところで、自分の役割を認識し、それぞれの状況で自分に何が求められているのかを判断して行動する、ということは、シーヘブン以外でも見られる。当

該の役割のために誰かが雇われ、雇われた人がその役割を果たすのも極めて日常的なことであり、雇われて役割を果たしているが故に本物ではない、と常に断言することはできない。例えば、接客業務が高度にマニュアル化された飲食店で客が食事をし、アルバイトの店員からサービスを受ける場合、マニュアルに従って行動しているにすぎない店員は本当の店員ではなく、客と店員の関係は偽物である、とは言えない。客がマニュアルの存在や内容を知っているかどうか、二人の関係にとって本質的ではない。この点、トゥルーマンと周囲の人々との関係についても同じことが言える。シーヘブンに住むトゥルーマン以外の人々は皆番組で雇われ、台本に従って自分の役割を果たしているにすぎず、そしてトゥルーマンは、台本の存在や内容を知らない。しかし、故にトゥルーマンと彼らの関係は偽物である、と言い切ってしまうことはできない。

もちろん、以上の議論は未だ粗雑なものでしかなく、本来は一つ一つの関係について個別に、さらには複数の関係の重なり合った状態について、どのように本物と偽物が区別され得るのか、より丁寧な検討が必要である²²。また、トウ

²² 一例として試みに、作中に登場する書店の店員とトゥルーマンの関係について、少し考えてみる。トゥルーマンは習慣的にこの書店に立ち寄り、店員の老人と会話して新聞や雑誌を買う（cf. *TS*, 04:21-04:40 etc.）。彼は店員役の人物と自分との関係を、店員と客の関係として（あるいは相応の友人関係として）理解しているだろう。他方、店員役の人物は番組の台本に従って行動しているにすぎない。このとき、店員と客という二人の関係は偽物である、と主張するとして、その根拠は何か。店員が偽物であることや、書店が偽物であることが根拠となるように思われるかもしれないが、ならば、店員や書店を偽物とする根拠は何か。第一に、この店員は偽物なのか。トゥルーマンが店員とのやりとりをいわば「真に受けて」、相手を本物の店員と見なしているのに対し、店員の側は同じやりとりを演技として行っている。店員本人は、自分は店員の役を演じているだけで、本当は店員ではない、と自覚しているはずである。しかし、このような本人の自覚だけでは、彼を偽物と断じるにはやや心許ない。ある俳優が一日だけ、シーヘブン以外のどこかの書店で店員の役を演じ、書店を訪れる客は店員が俳優であることを知らない、と想像してみよう。このとき、店員は偽物である、と言えるだろうか。言えるかもしれないが、しかし一体、何が偽りなのか。店員役の俳優が、自分は役を演じているにすぎないと自覚していても、観察できるのはその俳優が実際に店員として働いている姿のみであり、彼が店員の仕事をしていること自体は偽りではない。この一日の仕事によって彼が得る報酬は、店員としての仕事に対してではなく、俳優としての仕事に対して支払われるのだろうが、この俳優が行ったのは店員の仕事に他ならず、彼が店員としてこの店に雇われていた場合と、行動としては全く同じである（ただし、報酬額は異なるか

ルーマンの仕事上の関係などについてはともかく、妻や友人との関係についても「偽物であるとは限らない」と述べることに、異論もあるだろう。確かに、仕事上の関係がいわば「公的」なものであるのに対し、夫婦関係や友人関係は「私的」なものであり、この点で両者は異なる、ということも不可能ではない。シーヘブンの特殊性を、トゥルーマンにとって私的なはずの関係が、本人の知らない内に公的なものとして位置づけられてしまっている、という点に求めることもできる。トゥルーマンが帰宅したとき、彼は自分が私的な空間に居ると認識しているが、実はその場所は公的な空間であり、「自宅」というサービスを提供する店のようなものでしかない。トゥルーマンの認識は誤っており、そしてこの誤りは、周囲の人々によって意図的に作り出されている。意図的に誤った認識を抱かされている限りにおいて、トゥルーマンが「騙されている」

もしれない)。実際にその役割であることと、その役割を演じることとの区別は案外難しい。店員として雇われている誰かが自分の仕事を、あたかも俳優に与えられた役であるかのように捉えて「演技」と割り切ってこなす、という場合もあるだろう。演技かどうか本人の自覚だけで決まるならば、店員と店員役の俳優との境界はかなり曖昧なものとなる。また、俳優が店員を演じるのが一日だけではなく、例えば一年、あるいは30年ならばどうか。本人がどのように自覚しているかにかかわらず、演じる期間が長くなればなる程、本物と偽物の区別がさらに曖昧になるように感じられるとすれば、シーヘブンで長年この役を演じ続けているはずの店員について、直ちに偽物と判断するのは躊躇われるだろう。第二に、この書店は偽物なのか。この書店がシーヘブンにあることを指摘するだけで、偽物であることを示すには十分であるように感じられるかもしれないが、議論のために一旦、上記の例に倣って「シーヘブン以外のどこかの書店」と考えておくことにしよう。シーヘブンの書店がトゥルーマンだけを客としており（他の客に商品を売る場面もあるが、そのような営業活動はトゥルーマンや視聴者の目を意識したものでしかないのだろう）、彼が現れないときには全く営業していないのと同じく、シーヘブン以外の当該の書店が、一人の客を相手にしか営業しておらず、その一人が現れないときには営業していない、とした場合、この書店は偽物であることになるのか。しかし、一人の客だけを相手に営業する書店、という想定は決して不可能ではなく、実際にそのような書店が存在していても不思議ではない。そのような営業活動によって経営が成り立つのかどうか、という点は、「赤字の書店はすべて偽物である」という極端な基準でも設けるのでない限り、その書店が本物かどうかにとって本質的な問題ではない。したがってシーヘブンの書店に関しても、トゥルーマンを客として実際に営業活動が行われている以上、この書店を偽物と断じるのは早計である。以上のように、店員も書店も偽物であるとは限らないとすれば、店員役の俳優とトゥルーマンの「店員と客」という関係が偽物であるとも限らないことになる。

ことは事実であり、彼がその事実を知ったならば、テレビ番組の脚本に従って行動していたメルルやマーロンについて「妻ではなかった」、「友人ではなかった」と言うだろう。

しかし上述のように、シーヘブンにおけるトゥルーマンと同様の夫婦関係、友人関係はシーヘブン以外でも存在し得る。例えばAとBが友人であり、Aはこの友人関係を職業的なものではないと捉えているが、Bはその関係をあたかも職業上のマニュアルに従ったものであるかのように捉えており、AはBがそのように考えていることを全く知らない、という事態は容易に想像できる²³。当該の関係についての両者の認識が一致し、両者が職業的ではない仕方でお互いに関わる、という条件は、望ましい友人関係の条件ではあり得るかもしれないが、その友人関係が偽物でないことの条件として用いるには厳しすぎる。ある関係が友人関係か否か、という問いと、その関係が望ましい友人関係か否か、という問いとは異なる。上記の条件は、後者の問いに関する特定の価値観を示したものでしかなく、この条件を直ちに前者の問いに適用することはできない。

また、シーヘブンでのトゥルーマンの生活は、本人の同意なしに撮影され、世界中で放映されているが、何かが撮影され放映されていることは必ずしも、その何かが偽物であることを意味しない。シーヘブン全体は巨大なセットで、この番組のために作られてはいるが、何かが特定の目的のために作られていることだけを根拠に、その何かが偽物であると結論することはできない。

²³ シーヘブンではこの「職業上のマニュアル」が、明文化された脚本として実在するのに対し、より一般的なケースで当該のマニュアルは必ずしも実在しない、という点に違いを認めることもできるかもしれないが、その関係がどのような関係か、という問題に関して、この違いは特に重要ではないように思われる。明文化された脚本が存在しなくても、自分に与えられた役割に関する明確な認識は存在し得るし、その役割が特定の誰かからの指示に基づく、というケースも想像され得る。

【シーヘブンと現実世界の区別】

シーヘブンにおけるトゥルーマンの生と、シーヘブン以外の場所での生とを比較するならば、両者の境界は案外、曖昧である。本節冒頭で述べた最初の印象とは異なり、トゥルーマンの生が本物ではなく偽物であることは、決して自明ではない。

この曖昧さは、シーヘブン以外の現実世界もまた、シーヘブンにおいて過度に強調されているような「演技」としての要素をすでに含んでいる、という点に由来するように思われる。マトリックスと現実世界に関しては、機械につながれているか否か、という違いに基づく区別が可能であるのに対して、シーヘブンと現実世界にそのような違いは存在しない。トゥルーマンも他の人々もシーヘブンにおいて、シーヘブン以外の現実世界と同様、機械につながれることなく行動している。二つの世界の区別は、身体の状態や行動それ自体によってではなく、同一の行動に関する解釈の違いによってなされる。

一般に経験は、単に行動それ自体に留まるものではなく、その行動をどのようなものとして理解するか、という解釈を含んでいる。例えば、両手を高く上げる、という動作は、背伸びをすることでも、高い所にある物を取ろうとすることでも、踊ることでも、何かを祝うことでも、降伏することでもあり得る。誰かと同じテーブルで食事をとる、という行動は、見知らぬ他人との相席でも、ビジネス上の社交でも、恋人とのデートでも、映画の撮影でも、宗教的な儀式でもあり得る。シーヘブンは、シーヘブンにおける行動²⁴をトゥルーマン以外の全員が「演技」として行っており、行動に関するトゥルーマンと他の全員との解釈が異なっている、という点で、そのような著しい解釈の齟齬が全面的には生じないはずの現実世界と区別される。

シーヘブンは、トゥルーマン一人に特定の経験を与えるために組織的に構築

²⁴ より厳密には「シーヘブンにおけるトゥルーマンの目の前で（あるいは、撮影カメラの前での）行動」と述べる必要がある。

された世界であり、その意味で経験機械に似ている。経験の内容を選ぶのはトゥルーマン本人ではなくテレビ番組の製作者であり²⁵、経験を与えるのは機械ではなく実際の間人たちであって、かつ予定通りに進むとは限らないが、あくまでもトゥルーマンを中心とし、他のすべてがトゥルーマンとの関連で位置づけられている点で、現実世界との違いは大きい。そしてこの事実を、トゥルーマンだけが知らない。

しかし、繰り返し述べているように、規模や程度の違いはあるとしても、ある行動が一方にとっては演技でなく、もう一方にとっては演技でしかない、ということは現実世界でも起こり得る。トゥルーマンとメリルの関係は、目に見える行動に関しても、両者の内面に関しても、シーヘブン以外でも成立し得る類のものでしかない。しかもメリルは「私には、プライベートな生活と公の生活との区別がないの」とも述べており、この発言を信じるならば、彼女にとってシーヘブンと現実世界との区別は最初から存在しないかのようでもある。さらに、トゥルーマンがメリル以外の女性を想い続けている点を考慮するならば（後述）、彼もまた、メリルの前で「夫」としての役割を演じていたにすぎない、という可能性すらある。そもそも夫婦関係であれ友人関係であれ、それらの関係は各自が「夫」や「妻」や「友人」という役割を自覚し、その役割を果たすことに基づいており、俳優が与えられた役を引き受けて演じることとの間に、役割を自覚して果たす、という点で本質的な違いはない、とも考えられる。ある役割を実際に果たすことと、その役割を演じることが常に区別できるかどうかは疑わしく、その限りにおいて、仮想世界としてのシーヘブンが有する仮

²⁵ 仮にトゥルーマン本人が番組の製作者側に立ち、自分がシーヘブンで経験する内容を選ぶならばどうか、と考えることもできる。トゥルーマンが自分の置かれている状態や今後の出来事について正確に認識することで、クリストフが述べていたような「本物」としての要素は失われるのかどうか。仮に著しく失われるとしても、その場合と経験機械につながる場合とを比べて、もし前者の方がより「本物」である、と感じられるならば、前者の内にも未だ「本物」と呼び得る何かが残されていることになるし、おそらくその何かは単に身体の状態だけに留まらないように思われる。

想性は、すでに現実世界にも含まれているように思われる²⁶。

また、トゥルーマンが自分の置かれている状況について無知であることは、彼にとってはシーヘブンが現実世界として、すなわち仮想でない世界として認識されていることを意味する²⁷。クリストフの言うように、「彼が暮らしている世界は幾つかの点でまがい物だが、トゥルーマン自身には何のやらせもない」。この点は特に、トゥルーマンの感情に関して際立つ。

作品の中盤、インタビュー番組で、司会者のマイクとゲストのクリストフが、トゥルーマンの父親であるカークを溺死させて、トゥルーマンに水への恐怖心を植えつけたことについて語る場面がある。

クリストフ：トゥルーマンが大きくなるにつれて、彼を島から出さないための方法を考えなければならなくなりました。(…) やっと思いついたのが、カークを溺死させることです。

マイク：効果的でしたね。トゥルーマンはそれ以来、水が怖くなってしまいました。(TS, 1:04:01-1:04:24)²⁸

²⁶ 本稿では詳述を避けるが、このような現実世界の在り方を、特定の社会に固有のものとする考えことも不可能ではない。映画「マトリックス」に関する論文の中で、スラヴォイ・ジジェクは「トゥルーマン・ショー」に言及し、次のように述べている。「後期資本主義の消費社会では、「現実の社会生活 (real social life)」そのものが何らかの形で、ステージ上の偽物としての特徴を持つようになる。我々の隣人たちは「現実の」生活で (in “real” life)、ステージ上の俳優やエキストラとして振舞う。功利主義的で精神を奪われた (despiritualized) 資本主義的な宇宙に関する究極の真理は、「現実の生活 (real life)」そのものが物質から切り離され (dematerialization)、現実の生活が反転して実体のないショー (a spectral show) になる、ということである」(Žižek [2002], pp. 242-243)。

²⁷ この点は、経験機械やマトリックスにつながれた人にとって、機械によって与えられる経験が仮想でないものとして認識されるのと同様である。

²⁸ CHRISTOF : As Truman grew up, we were forced to manufacture ways to keep him on the island. (…) Finally, I came up with the concept of Kirk’s drowning.

MIKE : Most effective. Truman’s been terrified of the water ever since.

少年時代に父親の死を経験したことで、トゥルーマンは水が怖くなり、海岸を頻繁に訪れはするものの、船などには乗れないため、島から出ることができなくなってしまふ。カーク役の男性が実際に死んだわけではなく、トゥルーマンは騙され、コントロールされている。水への恐怖心は意図的に植えつけられたものでしかない。しかし、どのような仕方ですじたにせよ、トゥルーマンが水を怖がっていること自体は事実であり、彼の恐怖は偽りではない。

製作者の意図しなかった感情が生じる場合もある。妻であるメリル以外に、トゥルーマンはローレンという役名の女性に想いを寄せている。彼女は番組の進行を無視してトゥルーマンを連れ出し、彼に真実を伝える。「皆、あなたを知ってる。あなたの行動を何でも知ってる。彼らは演技をしているの、トゥルーマン。（…）私の名前はローレンじゃない、シルヴィアよ（Everybody knows about you. Everybody knows everything you do. They're pretending, Truman. （…） My name is not Lauren. It's Sylvia）」彼女の予想外の行動も、しかし番組にとって致命的ではない。この一連の流れは回想場面として放送され、「トゥルーマン・ショー」の中に取りこまれる（cf. TS., 19:22-27:54）。さて、トゥルーマンのシルヴィアへの愛情は、想定外であるが故に本物で、メリルへの愛情は、意図されていたが故に偽物なのか。ある感情が本物か偽物かは、どのような仕方ですじたかによって決まる、と考えるならば、上記のように述べることもできるかもしれないが、水への恐怖心の場合と同様、感情が生じていること自体は事実である。メリルへの愛情が足りないとすれば、その原因は単にキャストにあり、もしメリル役をシルヴィアが演じていたならば、状況は変わっていただろう、とも想像される。

誰かによって意図的に与えられた感情は偽物である、とすれば、シーヘブン以外の現実世界における多くの感情も偽物であることになってしまう。感情の真偽が生じ方には左右されないとすれば、やはりこの点でも、シーヘブンと現実世界の区別は曖昧である、と言える。

【トゥルーマンの選択】

作品の結末、トゥルーマンはシーヘブンから出て、外の世界へ行くことを選ぶ。トゥルーマンは一体何を選んだのか。シーヘブンの外にいるはずのシルヴィアを選んだ、とも考えられるが、その点は一旦置いて、世界それ自体に関わる問題として検討してみる。

上記のインタビュー番組で、ゲストのクリストフと、視聴者として電話で参加したシルヴィアが言い争う場面がある。

シルヴィア：赤ちゃんを連れてきて、**彼の人生**をバカバカしい茶番みたいにする権利があなたにあるの？ 後ろめたく思ったことないの？

クリストフ：私はトゥルーマンに、**普通の生活**を送るチャンスを与えたんだ。君の住んでいる世界は病んでいる。世界はシーヘブンのようであるべきなんだ。

シルヴィア：彼は役者じゃなくて囚人よ。見なさい！ 自分が何をしてるのか！

クリストフ：彼はいつでも出ていける。あやふやな望みなんかじゃなくて、真実を突きとめると固く決めたなら、彼を止めることなんてできない。本当に君を悩ませているのは、視聴者さん、君の言う監獄を結局トゥルーマンが気に入ってる、ということじゃないのか。

シルヴィア：ああ、何もわかってないのね。(TS, 1:07:12-1:08:06)²⁹

²⁹ SYLVIA : What right do you have to take a baby and turn **his life** into some kind of mockery? Don't you ever feel guilty?

CHRISTOF : I have given Truman a chance to lead **a normal life**. The world, the place you live in is the sick place. Seahaven is the way the world should be.

SYLVIA : He is not a performer. He is a prisoner. Look at him! Look at what you've done to him!

CHRISTOF : He can leave at any time. If his was more than just a vague ambition, if he was absolutely determined to discover the truth, there's no way we could prevent him. I think what distresses you really, caller, is that ultimately Truman

シルヴィアとクリストフは、トゥルーマンの人生・生活（life）をめぐって対立している。シルヴィアが「バカバカしい茶番」と呼ぶものをクリストフは「普通の人生」と呼び、彼女にとっての「監獄」をクリストフは、「病んでいる世界」とは異なる理想の世界と見なす。二人とも、トゥルーマンに対して深い愛情を抱いている点では共通している。上記の口論の後、シルヴィアは、テレビ画面の右上に小さく映ったトゥルーマンの映像に右手で触れるが（cf. *TS*, 1:08:24-1:08:55）、そのシーンに続くのは、大画面に映ったトゥルーマンにクリストフが同じく右手で触れる場面である（cf. *TS*, 1:09:04-1:09:56）。同様の愛情に基づいて、シルヴィアはシーヘブンにおける生を否定し、クリストフは肯定する。トゥルーマンが迫られているのは、この二種類の生、二種類の世界のどちらを選ぶのか、という選択である。

作品の結末で、トゥルーマンは水への恐怖心を克服してボートに乗り、シーヘブンのセットの果てに到達する。彼が外へ出るドアを開いた瞬間、クリストフの声が空の上から響き、トゥルーマンに語りかける。

トゥルーマン：あなたは誰？

クリストフ：私はテレビ番組の製作者だ。この番組は、たくさんの人に希望や喜び、インスピレーションを与えている。

トゥルーマン：じゃあ、僕は誰？

クリストフ：君はスターだ。

トゥルーマン：全部偽物だったの？

クリストフ：君は本物だよ。だから視聴者が楽しめるんだ。いいか、トゥルーマン。外にある真実も、私が君のために作ったこの世界の真実と変わらない。同じ嘘があって、同じように騙されるだけだ。でも私の世界

prefers his cell, as you call it.

SYLVIA : Oh, That is where you're wrong.

にいれば、何も恐れる必要はない。私は君以上に、君のことをよく知ってるよ。

トゥルーマン：僕の頭の中は映せないだろ！

クリストフ：怖いんだろう。だから外に出られないんだ。(TS., 1:32:21-1:33:25)³⁰

クリストフが外の世界について言っていることは、おそらく正しい。シーヘブンと外の世界に本質的な違いはなく、同じ嘘や偽りがあるにすぎない。結局、トゥルーマンは外へ出ることを選ぶが、外の世界で待っているのは、「トゥルーマン・ショー」を熱狂的に観るような人々で溢れた世界でしかなく、その世界にシーヘブン以上の幸福が待っているとは限らない。

ところで、この最後の場面は明らかに、神と人間の対話として演出されている。クリストフは空の上から「私は創造主だ (I am the creator)」と語りかけ、モニターでトゥルーマンの様子を見ている。他方、トゥルーマンは空を見上げ、空から響いてくる声を聞いているだけで、彼にクリストフの顔は見えない。このような二人の非対称性は、典型的な神と人間の関係を想わせる。クリストフが話すように、偽りである点ではシーヘブンも外の世界も同じであるとすれば、二つの世界の違いは、クリストフによって守られているか否か、コン

³⁰ **TRUMAN** : Who are you?

CHRISTOF : I am the creator of a television show that gives hope and joy and inspiration to millions.

TRUMAN : Then who am I?

CHRISTOF : You are the star.

TRUMAN : Was nothing real?

CHRISTOF : You were real. That's what made you so good to watch. Listen to me, Truman. There's no more truth out there than there is in the world I created for you. The same lies, the same deceit. But in my world you have nothing to fear. I know you better than you know yourself.

TRUMAN : You never had a camera in my head!

CHRISTOF : You're afraid. That's why you can't leave.

トロールされているか否か、という点に求められることになる。このときトゥルーマンが直面しているのは必ずしも、偽りの世界と真実の世界との選択ではない。そのような当初の問いが、同じく偽りであるような二つの世界の内、コントロールされた安全な世界を選ぶのか、コントロールされておらずクリストフの庇護もない世界を選ぶのか、という問いへと転じる。

「トゥルーマン・ショー」に関する論文で、キンバリー・A・ブレッシングは次のように述べている。

もし私が単なる操り人形や俳優で、誰かが脚本に書いた役割を演じているだけならば、私の人生 (*my life*) に意味があると考えるのはかなり難しい。言い換えれば、人生 (*life*) の意味について考え始める前に、「人生」一般 (“*life*” in general) についてであれ自分たちの個々の人生 (*our own particular lives*) についてであれ、我々の生きている人生 (*the lives we are living*) が本当に我々のものである、と確信しておかなくて良いのだろうか。(Blessing [2005], p. 8)

この考え方は多数の共感を集めるかもしれないが、神に与えられた役割を果たすことに人生の意味を見出す、という類の有神論的な価値観を初めから排除することにもなってしまう。人間であるクリストフを「神」と見なすことの是非はともかく、何かや誰かから与えられた役割を果たすことや、何かや誰かに守られて生きることが無意味とは限らない。世界的なテレビ番組の「スター」としての役割を引き受けることにも一定の意義が見出されるかもしれず、したがって、シーヘブンに留まる、という選択肢が予め失われているわけではない³¹。

³¹ トゥルーマンがシーヘブンに留まり、以後はクリストフではなくトゥルーマンが脚本を書く、と想像してみることもできる。この場合、もはや彼は他人の操り人形ではな

その上で、しかしトゥルーマンは、やはり外へ出ること、クリストフから自立することを選ぶ。少なくともこの時点でのトゥルーマンにとって、このまま「神」の監視とコントロールの下で生き続けることは、クリストフの「怖いんだろう」という言葉に屈することではしかない。「神」の言葉に抗ってその庇護から離れる、という彼の選択は、典型的な成長物語の結末として相応しいと同時に、一種の有神論批判としても機能しているように思われる。(続く)

参考作品・参考文献

MTR. : *The Matrix* (邦題「マトリックス」、The Wachowski Brothers 監督、1999 年、アメリカ)

TS. : *The Truman Show* (邦題「トゥルーマン・ショー」、Peter Weir 監督、1998 年、アメリカ)

Blessing [2005] : Kimberly A. Blessing, “Deceit and Doubt : The Search for Truth in *The Truman Show* and Descartes’s *Meditations*”, in Kimberly A. Blessing and Paul J. Tudico ed., *Movies and the Meaning of Life : Philosophers Take on Hollywood*, Chicago and La Salle : Open Court, 2005, pp. 3-16.

水谷 [2009] : 水谷雅彦「バーチャルリアリティは「悪」か」、日本哲学会編『哲學』第 60 号所収、2009 年、67-82 頁。

Žižek [2002] : Slavoj Žižek, “The Matrix : Or, The Two Sides of Perversion”, in William Irwin ed., *The Matrix and Philosophy : Welcome to the Desert of the Real*, Chicago and La Salle : Open Court, 2002, pp. 240-266. [スラヴォイ・ジジェク「マトリックス、あるいは倒錯の二面」、ウィリアム・アーウィン編『マトリックスの哲学』所収、松浦俊輔・小野木明恵訳、白夜書房、2003 年、312-344 頁]

く、おそらくシーヘブン以外のどの世界におけるよりも完璧な仕方、他人によるコントロールから自由であり得るだろう。にもかかわらず、そのような人生に意味を見出すことが難しいとすれば、本当の問題は、自分が「単なる操り人形や俳優で、誰かが脚本に書いた役割を演じているだけ」かどうか、という点に（少なくともその点だけに）あるのではない。